

SEIG

聖学院大学

後援会会報



All Seigakuin Fellowship

第64号

2023年12月15日

発行所：聖学院大学後援会 発行人：古屋博規 〒362-8585上尾市戸崎1-1 TEL048-781-0925 FAX048-726-2962 E-mail：parents@seigakuin-univ.ac.jp

そなえよ常に

聖学院大学後援会 会長 古屋博規



2023年10月、学校法人聖学院は、創立120周年記念式典と、オルガン奉獻式を挙行了しました。素晴らしいオルガンの奉獻と、これから、パイプが整えられ完成される時を楽しみに待ちたいと思います。

パイプオルガンのお話で忘れられないことは、きよしこの夜、誕生逸話です。1818年に、オーストリア聖ニコラウス教会で初演された時、クリスマス翌日の礼拝で使うはずのオルガンの音が出なくなり、副牧師のヨゼフモールは、途方にくれながら近くの丘に登って美しく輝く夜空の星を見ながら、穏やかに眠っている平和な世界を歌詞にして、開演の数時間前に完成したのです。モールはテナー、グルーパーはバスとギターの二重唱でミサが始まりました。オルガンに替わってギターの伴奏で、きよしこの夜が初めて歌われ、ギターがその役割を果たしたのです。

今から140年前に、アメリカカディサイプル派の宣教師、チャールズガイルスト夫妻と、スミス夫妻の東北 秋田の宣教の歴史は、貧しさで苦しむ農民の福音となりました。この歴史から聖学院120年の歩みに繋がります。「神を仰ぎ、人に仕う」とアメリカから来日した宣教師が、秋田伝道に励んだ軌跡は、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはみな加えて与えられる。」マタイ6章33節に遡ります。2024年を

迎えるクリスマス点火祭には、いつも私たちを導いて下さる神様の守りの中、新たな年を迎えましょう。

歴史を物語るのには、ドイツの元大統領ヴァイツェッカーの「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目」と、目を背けぬ姿勢を、本学のガルスト奨学金授与式を通じて貫いています。白鷗大学教授の栗山英樹元WBC監督は、「すべて上に立つ者は、得意な方面があることが良くない。専門分野を持つべきではない」と、江戸中期の儒学者、徳川吉宗公の信任を得た、萩生おぎゆう徂徠そらの言葉を紹介し、「ある分野に熟達していると、たとえ自慢をしなくとも、人情の常としてその人を見下して、意見を聞き入れようとならない。下の者の意見も吸い上げることができると、ある分野に熟達しないほうがいい。」と、説いたのです。栗山英樹元WBC監督は、大谷翔平投手は、どの選手にあってても、力を抜かず、全力を込めて投じている様子を語りかけています。

標題「そなえよ常に」は、ロバート・ベーデンーパーウエル(BP)のボーイスカウトのBPスピリッツの三つの誓いです。一つ 神と国とに誠を尽くし掟を守ります。二つ いつも他の人々を助けます。三つ からだを強くし、こころをすこやかに、徳を養います。

この歳、後援会組織が、4年振りに(コロナ禍にあって)新たなスタートを切りました。ヴェリタス祭は、副会長田中英樹さんが陣頭指揮をとり、役員15名の方々が尽力下さいました。私も、田中さんも同じボーイスカウト出身である事を、意気に感じ、神様の導きを深く感謝致します。

4年ぶりの通常開催となる今年のヴェリタス祭は3日、4日両日も好天にめぐまれました。後援会バザーブースの出足はゆっくりでしたが順調に売れていきました。

今回のバザーブースでは日用品のほか花の苗、新米の販売や「和菓子セット」としてどら焼きとお茶を提供するミニ喫茶もオープンしました。広いキャンパスを歩き疲れたお客様たちがバザーに足を止め、名店の和菓子を味わいつつ一息つく姿が見られました。

昼から始まったビンゴ大会では、北キャンパスの野外ステージを囲んで多くの学生、家族連れが集まりました。当たり数字が読み上げられるたび歓声があがり、当選者には大きな拍手が送られていました。

つい昨年まであまり目にする事になかった賑やかな風景。それが日常の風景に変わったことを肌で感じることができた1日でした。



ヴェリタス祭について

121A 保護者 中倉 友佳里

学長挨拶

聖学院創立120周年、
聖学院大学創立35周年を迎えて

聖学院大学学長 小池 茂子

明治36年(1903)年に、米国のプロテスタントキリスト教の一教派であるデイスアップル派の宣教師によって日本・本郷の地に聖学院神学校が設立された年から数え、聖学院は今年、創立120周年を迎えました。去る、10月28日(土)聖学院大学チャペルにおいて、来賓並びに幼稚園から大学まですべての学校に連なる教職員が集う中、創立120周年記念式典と大学バイبولガン奉献式・記念音楽会が厳かに挙行されました。

歴史に学べば、明治のキリシタン禁制の高札撤去の前後には多くのキリスト教諸教派が日本に宣教師を送り、キリスト教伝道のために、教育、医療、社会福祉活動、技術革新等の社会事業を行っていたことが明らかになっています。最初、秋田での社会改良事業を伴うキリスト教伝道からスタートした米国デイスアップル派の宣教活動は、日本の伝道には教育事業が必要との考えに達し、所謂ミッションスクールを首都である東京の地に設立したことが聖学院の始

りです。明治36年の聖学院神学校創立に

つき、明治30年代末〜40年代に今日の女子聖学院中学校・高等学校、聖学院中学校・高等学校、聖学院幼稚園の母体となる学校が東京・駒込の地に創立され、第2次大戦後、現在の聖学院小学校の母体となる小学校の創設に続き、1967年埼玉県上尾の地に女子聖学院短期大学、1978年聖学院みどり幼稚園の母体となる幼稚園を開設、それに続く形で1988年聖学院大学は政治経済学部一学部を有する4年制大学として創立されました。その後の学部設置・組織改編を経て、聖学院大学は現在、政治経済学部、人文学部、心理福祉学部の3学部5学科(政治経済学科、欧米文化学科、日本文化学科、子ども教育学科、心理福祉学科)を擁し、約1900名の学生が学ぶ大学へと発展してまいりました。

聖学院120年の歴史を引き継ぐ学校法人聖学院は、この4月に向こう5年間の中期計画となる「第2期聖学院ビジョン」を公開いたしました。この中で全聖学院が共有する「神を仰ぎ 人に仕う (Love God and Serve His People)」というスクールモットーの下、聖学院大学は「豊かな人間力(共感性・対話力・実践力)を養成し、市民社会の各分野で、専門性とコミュニケーション

ン力をもつて貢献できる人間を育成する」という教育目的を掲げ、これを目指して全ての学部学科が学生の教育研究を行っていき、ことを全教職員が確認いたしました。また、「一人を愛し、一人を育む。」というタグラインは学生と向き合う時に、教職員が常に心に刻んでいるメッセージです。激動する世界の中にあっても、聖学院120年の歴史と教育を継承するものと

後援会と大学の交流会

121P 保護者 奥迫 知恵

2023年9月9日土曜日に「後援会と大学の交流会」が行われました。交流会では大学の教職員の紹介挨拶、後援会の役員の紹介等、大学の教育現場の現状や環境これからの大学の改革に向けての目的別の対処策の説明がなされました。保護者からの質問を事前にとり、その質問に対しての説明を行いました。就職については就職先や就職率についての説明が分かれやすく行われました。在学中に就職が決まらない場合でも卒業後も相談にのりますとのことをお話を伺い感動いたしました。どのお話も様々な学生の環境に合わせて、その対処できるような整理されていると思われました。その後、学科別相談会がありました。私も参加させていただきました。学科の先生と対面での面談でした。子供のゼミの先生ではないが大学での様子は伺えませんが沢山のアドバイスを頂きました。子供が「何だろう?」と、分かっているが良かった事や、どの様な教科を取ったほうが良いとか、ここを注意したほうが等、様々なア

して、私どもは変えるべきことと変えるべきではないものを見極め、改革すべきは改革を行い、祈りつつ教育という神から託された使命を果たしてまいりたいと考えております。

後援会会員の皆さまにおかれましては、今後とも聖学院大学へのご理解とお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

ドバイスを頂き本当に本日、参加して良かったと思えました。家に戻り子供に『ゼミの先生に働きかけて下さるとのことなので、まずあなたは学校に行つてゼミの先生と直接お話をして、今後の計画を立てるように。』と伝えました。子供は少しおとなしい性格で自分から相談は思っていたので感謝しております。大学は本当に一人一人を大事に思い接してくださっていると感じました。今後も大学の行事に参加させていただき、後援会や大学のお手伝いが出来たらと思っております。



聖書を学ぶ会に参加して

1211C 保護者 長谷川 義兼

11月22日、古屋博規会長をはじめ関係者の皆様のご尽力により、多数の方の出席のもと、後援会の「聖書を学ぶ会」が開催されましたことに心から感謝を申し上げます。この度の菊地順先生による「世界の中心」というメッセージに触れたことは、聖学院大学が歩まれてきている理念を垣間見ることができたように感じます。また、この学びの会の席で心温まる交流に参加出来ましたことにも併せて感謝申し上げます。人々が日頃から抱える疎外感や孤独感は、このように聖書を学ぶことを通じてこれらを克服し、精神的な拠り所となり得ることを知ることができました。

近年、AI技術の飛躍的な進歩、グローバル化の波が地域や産業を問わず押し寄せ、高齢化の進展による社会構造の激変



が進行中であるなか、社会が要請する付加価値の源泉が資本から人材へ移行していると感じてやみません。このような背景においても、人と人との繋がりが衰退するものではなく、むしろコミュニケーションの重要性に光が浴び、時代に応じて自らスキルアップをはかつて成長を続ける人材が求められており、その活躍の場は無限に広がっていると感じます。

「聖書」には、異なる環境で育ち一見して価値観が異なる人と人を結びつける「力」があり、やがてその融合が大きくなつて「社会」を形成する礎となっていくこととでしょう。聖書を学ぶ会を通じて、大学が推し進めている教育が多様な人材の育成に大きく貢献しているのだと改めて実感いたしました。

パイプオルガンの完成について

聖学院大学総合研究所所長
パイプオルガン設置委員会委員長

菊地 順

長年待ち望んできましたパイプオルガンが、この度、よくよく完成の運びとなりました。この計画は、2004年秋にチャペルが完成した直後から本格的に始まったパイプオルガン設置のための献



金に基づいています。それは、長い間女子聖学院短期大学の学長を務められたW. G. クレーラ先生ご夫妻を初めとする短大関係者から始まり、その後聖学院大学の皆

様、特に後援会の皆様、また当時緑聖教会と呼ばれていた現在の聖学院教会の皆様、その他、実に多数の方々から多額の献金が捧げられました。2012年度末に1億円に達しました。それを受けて2013年6月にパイプオルガン設置委員会が正式に立ち上げられ、まずパイプオルガンについての学習会や他の大学等

の完成となり、関係者一同感慨深いものがあります。

パイプ2、836本、ストップ40の威容堂々たるパイプオルガンとなりました。今後、礼拝や式典等での活躍が期待されていますが、またコンサートも開催していきたいと願っております。是非今からお楽しみにお待ちしております。

以上、心より感謝しつつ、ご報告とさせていただきます。

のパイプオルガンの下見を行い、その後協議を重ねてビルダーの選定へ入り、紆余曲折を経て2019年3月にガルニエ社にお願いすることになりました。そして、新型コロナウイルスのため予定より少し遅れることになりましたが、聖学院創立120周年を祝うこの秋に完成する運びとなり、10月28日にもたれたその式典でパイプオルガンの奉献式を行い、その後演奏会を開催することができました。チャペル完成後19年、またそもそもの始まりであるチャペル建設委員会が発足して丸30年を経て、すべての完成となり、関係者一同感慨深いものがあります。

聖学院大学に入学して

123P 保護者 野村 幸永

子供と暮らしていても生活時間が違うため、話す時間がほとんどないので、聖学院大学に入学して少しずつ変化していると思えるのは、時間管理が出来るようになったことです。以前は昼夜逆転の生活でしたが、大学に入学して授業を自分で組み立てるというシステムに気がついてくれたからだと感じています。

いかに時間管理が大切かと学んでくれた事は大いに褒めたいと思います。今後、更に期待している事は

- ①様々な環境の違う同級生と学び合ってもらいたい。
- ②自立心を育てて欲しい。
- ③より専門的な分野を勉強して欲しい。
- ④大学卒業で開かれる選択肢もたくさんあると気がついて欲しい。
- ⑤海外からの学生を見て各国民性、人々の考え方が実に色々だという事を身をもって感じて欲しい。
- ⑥世界で通じる語学を身につけて欲しい。

聖学院大学の学生には海外からの学生も多いので本人の意識次第ですが期待します。最後にありますが、子供が卒業する時に、聖学院大学に入学して良かったと言えるように私自身、後援会委員として子供を側から支え、応援していきたいと思えます。

2023年度聖学院大学の主な取り組み、動き

経営企画部長 真野 和英

- 1. **新学長就任** 清水正之前学長に代わり、小池茂子が新学長に就任しました。
- 2. **「児童学科」子ども教育学科名称変更** 児童学科は子ども教育学科へ名称を変更しました。児童学科として歩んできた30年を守りつつ、これからの時代を見据えた子どものプロフェッショナルを育成します。
- 3. **学生エンカレッジセンター窓口(愛称:フリア)開設** 4号館1階エントランスに、学生エンカレッジセンター窓口フリアが新設されました。学生の総合相談窓口の機能と、学生の「やりたい」を応援する機能を併せ持つ、学生支援セクションとして稼働しています。
- 4. **第2期SEIGビジョン2023-2027策定** 2018年より5年間、誰一人取り残さないをコンセプトに第1期聖学院ビジョンを実行し、変わり続ける時代に求められる教育と社会貢献を見つめ直してきました。2023年に迎えた第2期では、聖学院が創立時より120年にわたって大切にしてきた「神を仰ぎ 人に仕う」の精神のもとで、聖学院のキリスト教教育の持つ価値を高め、地域から世界へ貢献できる人材育成をさらに拡げていくための重点実施項目とアクションプランを示しています。
- 5. **新型コロナウイルス感染症活動制限レベル0に移行(6月)** 新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類感染症に移行したことに伴い、「聖学院大学新型コロナウイルス感染症に伴う活動制限ガイドライン」を「レベル0」とし、原則コロナ禍前に戻すことを基本とし

した。コロナ禍で休止していた夏期海外研修プログラムも再開し、交換留学生派遣と受入れも再開しています。

- 6. **ボランティア活動支援センター設立10周年記念「ボランティアの集い」** 3月21日(火・祝)、ボランティア活動支援センター設立10周年を記念した「ボランティアの集い」が開催されました。前半は、開設10周年に合わせ出版された、書籍「共に育つ」学生×大学×地域。ー人生に響くボランティアアコードイネーションーの出版記念シンポジウム、後半は在学生・卒業生・教職員による懇親会が行われ多くの参加がありました。
- 7. **学校法人聖学院120周年記念式典及び記念事業** 学校法人聖学院が創立120周年を迎え、10月28日(土)に記念式典・パイプオルガン奉獻・記念音楽会を開催しました。学校法人に連なる大学・駒込各校の教職員全員及びご来賓が大学チャペルに集い、完成したパイプオルガンの演奏とともに祝いの時を持ちました。また、大学における記念事業として、学生イベント「120周年記念フレンドリーデイズゴルフ大会(5月13日)」「学術イベント「関根清三 大学院特命教授による記念講演会(11月3日)」が行われ、こちらも盛況の内に終えました。
- 8. **5月27日ジュベナリス祭(体育祭)** 4年ぶりにジュベナリス祭が行われ、ドッチビー大会を実施しました。新入生40名を含む、上級生、教職員が参加し、熱戦が繰り広げられました。
- 9. **11月3・4日ヴェリタス祭(大学祭)** 今年度のテーマは「三位一体」、キリスト教の中心的な教えといえる「三位一体」をもとにヴェリタス祭実行委員会、参加団体、来場者の皆様と三つの象徴的なアイコンが一体となってヴェリタス祭を作り上げたという思いが込められた言葉になりました。来場者は両日合わせて2,000名程、コロナ禍中に様々な制限があった苦労を乗り越えて、久しぶりに制限のない大学祭を満喫することができました。
- 10. **11月22日クリスマスツリー点火祭** 南キャンパスの中庭にある8メートルの大学のシンボルツリーがライトアップされます。ライトアップは1月6日エビフィアニー(公現祭)まで見ることができそうですので、是非この機会にキャンパスに足をお運びください。
- 11. **第34回 関東学生新人選手権大会 男子200m優勝** 男子200m決勝に出場した池田康生さん(心理福祉学科1年)は後半伸びのある見事な走りで20.95(+1.8)の自己新記録を出し見事優勝に輝きました。池田さんのこの記録は、日本インカレA標準、日本選手権標準記録を突破しており池田さんの来シーズンの活躍に期待が掛かります。池田さんの活躍に皆様のご声援を宜しくお願いいたします。

編集後記

この秋、群馬県にある吹割の滝に行ってきました。通称「東洋のナイアガラ」。非常に豪快、かつ刺激的で美しい滝です。周りの散策路もまた風情があり、とてもすがすがしい気持ちになります。滝からくる天然ミストは、心を開放的且つ癒してくれました。大学も少しずつコロナの前のような活気を取り戻してきました。来年はもっと良い年となりますよう、皆様にご加護があります。 H.T